

「ガリ切りの記」出版

四日市公害語り部・沢井余志郎さん

「生活記録運動」原動力に

ガリ版の文集で四日市公害を長年記録してきた語り部の沢井余志郎さん(88)＝四日市市三重丁丁目Ⅱが、『ガリ切りの記 生活記録運動と四日市公害』(影書房)を出版した。戦後、紡績工場に集団就職した女子工員らと続けた生活記録運動が、反公害運動を進める原動力にもなった、と書いている。

沢井さんは戦後、四日市市の東亜紡織泊工場で働いた。山形県の中学生の作文集『山びこ学校』(無着成恭編)に共鳴し、生活記録運動を始めた。

女子工員らは、貧しい生活ぶりや足の踏み場もない寄宿舎生活など、ありのままを作文につづり、話し合ってきた。この活動は女子工員を成長させ、寄宿舎の増築を実現させる力にもなった。

その後、沢井さんはコンピュータの公害と闘つたことになるが、生活記録運動の

原点が胸にあつたという。「いつも、なぜ、と考える、自分の考えをもつ人間にならう」

「見たまま、聞いたまま、思ったままを、ありのまま、飾らずに、自分の言

葉で書こう」

「仲間たちで読みあい、話し合い、行動しよう」

被害の大きい磯津地区に通い、漁師の生活ぶりやせんそく患者の苦しみを、ガリ版文集「記録『公害』」に刻み込んだ。1968年から99年まで60号発行し、仲間を増やした。

本書に描かれた市長や議員、企業や労組、役所、学者、被害者らが公害に振り回される姿は、東京電力福

互いに学ぶ場、うらやましい

編集した吉田さん

沢井さんの記録活動をどう見たか。『ガリ切りの記』を編集した影書房(東京都北区)の吉田康子さん

(41)に聞いた。

私は高度経済成長期に横浜市で生まれた。一生涯懸命に暗記する教育を受け、そこで勝ち抜いた者だけが成功する世の中に不満だった。生活記録運動は、生き生きとした学びの場。互いの境遇を話し合い、社会への目を培い、仲間との結びつきを強めていく。うらやましいと思った。

島第一原発事故後の現状と重なるって映る。

「生活記録運動がなかったら、今の自分は存在しない」と言う沢井さん。本書の最後に「公害書、ppmの数字で表されるものだけではない。自然破壊、環境破壊であり、何より人間を破壊する。過ちを繰り返さないために、一人一人の市民、行政、企業に、この事実を知って、見て、考えしてほしい」とつづる。定価2千円(税抜き)。問い合わせは影書房(03・5907・6755)へ。

金銭的な豊かさが人間の豊かだといい価値観で生きてきている。工場事故が起きて生活が壊され、もう原発に頼るのはおかしいだ

「これかどうやって生きていくのかと話し合う、単純なところ立ち戻ってみてもいいのではないか。昨夏、磯津の集落を歩いた。そこだけ時間が止まっているように見えて、すごく驚いた。工場の誘致が恒久的な豊かさをもたらすものではないことがわかった。(聞き手・嶋田圭一郎)



語り部活動を続ける沢井さん＝四日市市塩浜



編集した吉田さん

「これかどうやって生きていくのかと話し合う、単純なところ立ち戻ってみてもいいのではないか。昨夏、磯津の集落を歩いた。そこだけ時間が止まっているように見えて、すごく驚いた。工場の誘致が恒久的な豊かさをもたらすものではないことがわかった。(聞き手・嶋田圭一郎)